大賞［留学生の部］

日本の伝統産業に深い理解を寄せ、取材・調査に基づいて日本人では気づかない視点で鋭く分析。その継承策への独創的な提案が、審査委員の高い評価を集めました。

若者でつなぐ伝統産業と未来社会
――人的資本の活用による伝統産業の継承

京都大学大学院 経済学研究科 修士課程２年
陳　慕薇　ちん ぼび　（中国）

1. 伝統産業の未来社会への意義

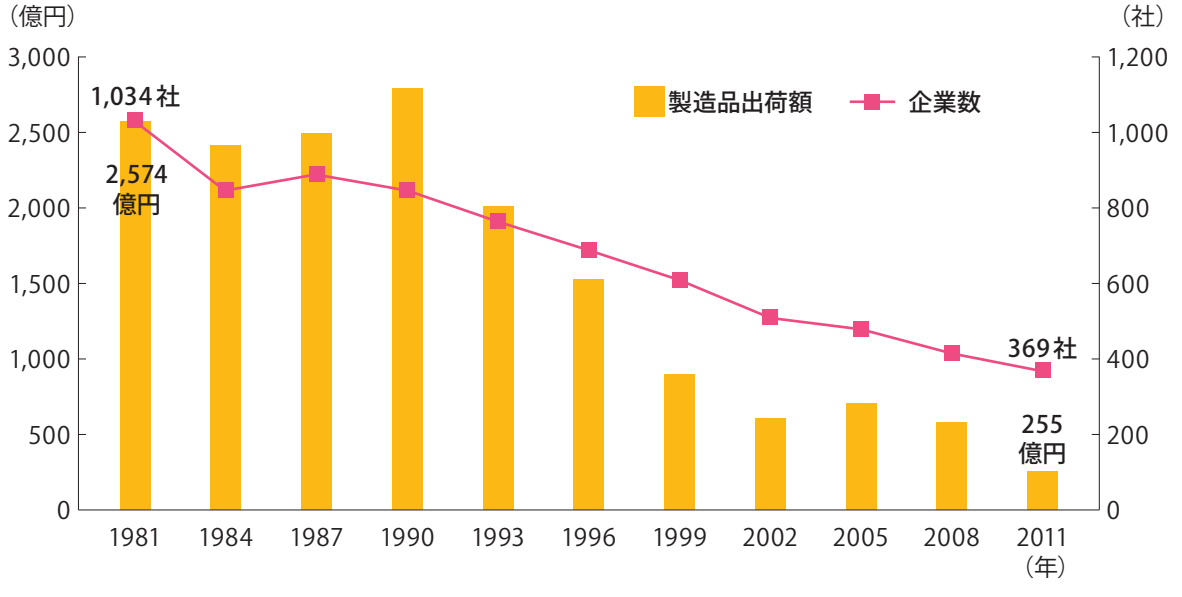
和装離れ、紡織技術の変化により、西陣織の出荷額と企業数は30年間、右肩下がりが続いてきた（図1）。それに伴い、西陣織物業に関わる従業員数も減少している。京都の先染め織物の代名詞ともいえる西陣織は、存続の危機にさらされている。しかし、現代社会において西陣織をはじめとする伝統産業を「無理矢理に」守ろうとすることは必要だろうか。必要であるとしても、需要の減少と新技術による代替が伝統産業の存続を脅かしている中、いかにして伝統産業を守ることができるのだろうか。つまり、未来社会に伝統産業を残す意味がどこにあるのか、そして、いかに残すのかという２つの課題が本論文のテーマである。

未来社会に伝統産業を残す意味として、主に以下の３つが挙げられる。

① 未来社会はグローバル社会であるため、ローカルの特徴を残すことはアイデンティティを明確化し、比較優位性を保つことを意味する。「民族のものこそ世界のもの」と言われるように、2000年の歴史を持つ日本ならではの技術と文化は、日本のものづくりの基礎、日本人の美的感覚、几帳面で繊細な国民性につながる。日本の未来社会の礎の大事な部分は伝統産業である。

②「古くて時代遅れ」と印象づけられている伝統技術には、先端技術が敵わないところがある。伝統技術にとって肝心なの

図１　西陣織の出荷額と企業数の推移



出所：第19次および第20次西陣機業調査委員会『西陣機業調査の概要』、西陣織工業組合『西陣生産概況 平成23年』より筆者作成

は、自然との調和と職人技である。自然から採取した原材料の特性を熟知し、気候風土に合わせて、手間をかけて仕上げた真綿布団、ところてん、紅花染めなどは、現代技術がどうしても敵わないほどの質と美しさを実現できる。神楽鈴の音色は、職人技で作られたものと機械で大量生産されたものとでは雲泥の差がある。日本の未来社会にとって、伝統産業の技がなければ後代の損失である。

③ 伝統産業は美学を極める産業である。例えば、西陣織のハンカチや財布、ポーチなどの小物系、屏風などのインテリアなどは、ますます現代人に好まれるようになってきた。日本の未来社会では、伝統産業の美学が人々の生活を彩っている。

その必要性を分かったうえで、伝統産業の技術、経験、美学を受け継ぎ、現代に生かすためには、後継者の育成が大事になってくる。それに欠かせないのは、人的資本（human capital）である。技術を代々伝えていくのも人であれば、常に革新させていくのも人であり、新たな活用を見つけ出すのも人である。特に若い世代に、この責任を担ってもらわなければならない。したがって、以下では伝統産業の後継者育成問題とその解決策を検討してみたい。

本論文は、京都の伝統産業関係者へのヒアリングとメディアで収集した職人のインタビューを基礎に、伝統産業が面している後継者問題の真実に迫る。その後、若者に伝統産業を未来社会につなげてもらうための方法を提案する。

2. 伝統産業の後継者問題

伝統産業は、全体的に職人の高齢化が進んでいる。例えば、京鹿の子絞り振興協同組合の調査によると、組合に所属する伝統工芸士のうち、60歳以上の伝統工芸士が4分の3を超えているという。それとともに、伝統産業の後継者問題が顕在化してきた。その一つは、技術を受け継いでくれる若者が来てくれないことである。門外不出の技術を習得するには長い年月が必要であるし、伝統産業自体が閉鎖的になりがちであるため若者が伝統技術と触れ合う機会が少なく、ベテラン職人に一人前と認めてもらえる敷居が高いため、両者の間に溝ができている。したがって、伝統産業がオープンになることが必要であり、両者間の双方向の交流が鍵となる。

2つ目の問題は、若年労働者の流動性が高いことである。ヒアリングでは、伝統技術に引き付けられる若者がかなりいる反面、長く続かず辞めてしまう人が続出していることがわかった。その原因を以下の4つにまとめた。

① 作品作り（美術品作り）と製品作りには違いがあるため、後者では重複作業に飽きてしまう。

② 会社が小さいため、売り上げは賃金に直接関係する。大手会社のように安定しているわけではない。

③ 職人の仕事は、きつい割に給料は安い。

④ 伝統産業は時代離れしているので、もっと同世代の人々に近づきたいという思いがつのる。

つまり若者の育成に問題があるため、今までの弟子入りの方法を見直さなければいけない。そこで、先進国が途上国への支援に使う「ペイシェントキャピタル」の概念を、若年職人の育成に転用してみたいと思う。

具体的に人的資本がいかに伝統産業の存続に運用されるのかは、以下に述べる。

3. 若者と伝統産業とが出会う場を設ける

伝統産業をテーマにする展示会は数多くあるが、その意図があまり若者に明確に伝わっていないため、若者は伝統産業に興味を持つことができなかった。展示会には主に2つのパターンがある。1つは博物館や美術館での展示で、技術も美学も値段も相当高い芸術品で、若者に近づきにくく感じさせるものである。もう1つはお土産系で、近づきやすい反面、製造業の商品という認識が強いため、伝統技術を学ぼうという意欲が湧かない。したがって、展示会にどういうモチベーションで臨むかによって、その役割はかなり変わると思う。

3-1.「外」向けの発信による可能性の拡大

「外」というのは、伝統産業に関わりのなさそうな若者を指す。老舗や職人の子孫はここでは論じない。閉鎖的になりがちな伝統産業がより広範な可能性を身に付けるためには、さまざまな分野の人をその輪の中に受け入れるべきである。たとえば、150年の歴史を持つ和傘メーカー『日吉屋』がデザイン照明器具に進出したきっかけは、とある展示会での外国人若手デザイナーとの出会いだった。そのデザイナーは和傘のデザインに魅了され、「そのデザインをランプに使ったら」と提案したのが始まりだった。現在、KOTORI「古都里」、MOTO「動」といった照明器具シリーズが、日吉屋の人気商品になっている。偶然の出会いだが、展示会は伝統産業と参加者が交流できる場であり、そのデザイナーのアイディアを受け入れたことが伝統産業に新たな可能性をもたらしたのである。

つまり、若者に伝統産業を継いでもらうには、弟子入りだけでなく、ものづくりの前段階や後段階に参加してもらったり、事業提携してもらったりすることによって、伝統産業に新たな生き方を与えるやり方がある。これに関しては4-2. で述べる。

3-2. 伝統産業に若者の可能性を発見

博報堂生活総合研究所が発表した『生活定点2012』によると、20代で「夢や希望が多い」と答えた人の割合は減っている。そ

の原因として、今ある日常に満足する傾向と安定志向に帰すると分析されている。イギリスの劇作家バーナード・ショー氏はこう言っている。「人生には二つの悲劇がある。一つは願いが達せられないこと。もう一つはそれが達せられること」。今時の日本の若者たちは、後者の悲劇に直面している。物質的な豊かさと平和かつ成熟社会により、夢を失った世代と言われている。

伝統産業は救世主ではないが、日本の古き良きものづくりは人生の生き甲斐を教えてくれると思う。冒頭で論じた伝統産業の意義に、その生き甲斐が含まれている。我々のアイデンティティと美学のあるライフスタイルを理解することにより、自己観が形成される。それは生きるモチベーションにつながる。それに、伝統産業の今でも劣らない高い技術と技には、自分を見失った若者たちを魅了する力がある。

したがって、若者に伝統産業の出来上がりを見せているだけでは物足りない。その出来上がりに至るまで、職人の細かい分業、仕事に臨む責任感と完璧主義、微差に気づく職人技、自然との会話、一点ものへの尽くし方などなど、つまり出来上がりの価値に値する、そしてさらにそれを超えるものを見せなければいけない。その伝統産業の唯一無二の尊さを感じることができれば、誘惑だらけの社会にいながらもきちんと自己観を形成することができるだろう。

要するに、若者と伝統産業の間で、双方向に情報が流れる場を設置することが、両者に新たな可能性をもたらすのである。いきなり継いでもらうことを考えずに、まず理解と交流を図ることによって、継承のパターンも多様化し、より多くの若者が伝統産業の輪に参加し、長く務めることができるようになるだろう。続いて、後継者育成の課題を見てみよう。

4. 後継者育成のペイシェントキャピタル

もともと伝統産業（主に手工業）は、産業集積によって産地の雰囲気で後継者が集まり、育ってきた。現在、伝統産業の産地が衰退し、産地内の水平的な分業が弱くなっているため、分散した伝統産業に新たな労働力が集まらず、仮に人が入っても長くは残らなくなった。

したがって、伝統産業における弟子入りによる後継者育成は現状に合わなくなっている。まとめてみれば、弟子入りのルートが不明確であることと、弟子入りという一貫したしくみしかないという2つの問題が浮き彫りになった。そこで、「ペイシェントキャピタル」という概念を導入してみたい。

4-1. ペイシェントキャピタルの転用

ペイシェントキャピタルとは、「忍耐強い資本」や「寛容な資本」と訳され、発展途上国で貧困にあえぐ小規模事業者などを投資対象として、自立できるまで支援し続けることを指す。短期間に高額リターンを求めるヘッジファンドと違い、10年以上の歳月をかけて事業を支援する。見返りを全く求めない場合も少なくない。

なぜこの概念を伝統産業の後継者育成に導入するのか。まず、伝統産業と関わりのない若者は技術も経験もなく、途上国の小規模事業者のように指導と支援を必要としている。伝統技術を習得するには少なくとも3年から5年が必要であるし、その間もボトルネックによく当たるため、長い目で後継者を育成しなければいけない。ただ、ここでのペイシェントキャピタルは金銭的な投入にとどまらず、ベテランから教わることや実習も含まれている。

それに倣って、2つほど提案したいと思う。弟子入りルートをオープンにすることと、後継者育成パターンの多様化である。

4-2. ペイシェントキャピタルの活用

門外不出の技術であるため、職人の後継者探しはほぼ知り合いの紹介である。それ以外に、自分が自ら名乗り出て、教えてもらえるように頼んだ人もいる。西陣織の織機の前に70代のベテラン数人以外に1人の28歳の女性がいて、一生懸命西陣織を作っている。「彼女が来てくれることがありがたい」と担当者が言っているが、そんな若者はかなり少ないし、彼女も何千万人に1人、西陣織の魅力を理解したうえで応募したのだった。伝統産業に一般応募してもらうことはなかなか難しいが、敷居を低く設定することによって、より多くの人に触れてもらうことで伝統産業に選択権を与えるのである。応募する人の中から面接や実習などを通して不合格の人を淘汰し、ふさわしい職人の卵を選りすぐる。それは、限りあるペイシェントキャピタルを適切な投資対象に活用することを意味する。

現在、美術学校に西陣織など伝統産業と関わる学科ができたという。それもペイシェントキャピタルの活用であり、美術学校の学生はもともとポテンシャルと能力を持っているため、その中から将来の職人になるまで育成していくのである。

2つ目の問題点に対しては、3-1. で触れたように、後継者の育成は一貫した技術を教えることに限らず、作成前のデザイン段階、作成中の技術改善、作成後の加工と販売などにおいて若者と協力・連携することも伝統産業の継承である。昔の伝統産業は一人の職人によって成り立っていたわけではなく、水平的分業をしっかりと行うことによって存在していた。新たな水平的分業を企画するつもりで、様々な分野の若者を伝統産業の輪に入れてもらうことが、ここでのペイシェントキャピタルの活用である。

おわりに

映画「バック・トゥ・ザ・フューチャーⅡ」では、空に飛び交う浮遊装置、ロボットによるサービス業、携帯情報端末、音声

認識スイッチ、多チャンネル同時表示テレビなどという2015年の未来社会を描いていた。25年前に描かれたアメリカの金属色のデジタル化された未来予想図が、来年果たされるかどうかは楽しみであるだろうが、日本、中国、ロシア、ブラジルなど様々な国には、それぞれの未来予想図があるべきである。そのひと味違う未来予想図に貢献するのは、それぞれの国の伝統産業であろう。

若者たちは現在と未来をつなげる役割を担っている以上、伝統産業が未来社会においてどう生きるのかを考えるべきであり、自らその使命を果たすべきである。

参考文献

・第19次西陣機業調査委員会『西陣機業調査の概要（西陣機業調査報告書）調査対象 平成20年』
・第20次西陣機業調査委員会『西陣機業調査の概要（西陣機業調査報告書）調査対象 平成23年』
・西陣織工業組合『西陣生産概況 平成23年』
・小藤弘樹、篠原総一「西陣機業の現状に関する統計的分析」同志社大学経済学部・経済学研究科ワーキングペーパーNO.26、p.3、2006年 3月
http://www.econ.doshisha.ac.jp/attach/page/ECONOMICS-PAGE-JA-146/27388/file/workingpaper026.pdf
・「京都府織布生産動態統計調査26年6月分」『統計京都NO.503 2014年8月』京都府政策企画部企画統計課
http://www.pref.kyoto.jp/tokei/monthly/tokeikyoto/tk2014/tkzenbun201408.pdf
・陳慕薇「老舗の維持発展」『京都の維持発展』岡田ゼミナール、2012年後期レポート
・日本経済新聞「やさしい投資　きょうのキーワード～ペイシェントキャピタル（Patient Capital）」
http://www.nikkei.com/money/investment/toushiyougo.aspx?g=DGXIMMVEW4002017052010000001
・京鹿の子絞振興協同組合ホームページ
http://www.kyokanoko-shibori.or.jp/index.html

［受賞者インタビュー］

新たな発想に現実性を持たせることに苦労した

――コンテストに応募した理由、きっかけは？

図書館でたまたまポスターを見かけて、テーマに興味を持ったからです。

――この論文を書く上で苦労したことは？

新たな発想を提案するには、現実性がないとただの空想になるので、いかに現実的に行うことができるのかということを考えました。

――この論文を書いたことで発見したこと、良かったことはありますか？

伝統産業に興味を持っている人がたくさんいるということです。伝統産業を仕事にしたり、生涯キャリアにするのは難しいものですが、世代替わりで若い後継者が現れることによって、伝統産業がオープンになりつつあります。

――今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

舞台を見ることです。今まで本や映画などでいろいろな作品を楽しんできましたが、去年から舞台を見始めて、「生」の力に衝撃を受けました。ストーリーだけでなく、表現の仕方も楽しむことができるからです。ミュージカル、時代劇、滑稽劇、新舞台など、いろいろなストーリーに引き込まれます。